

4. 看護学部看護学科

4.1 理念・目標

4.1.1 教育理念

人間の生命や生活の質を真に理解できる豊かな人間性ととも、専門的職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に貢献できる看護職及び看護指導者を育成する。

4.1.2 教育目標

1. 豊かな人間性と倫理観を備えた人材の育成

人間の生命、生活を尊重し、人の痛みや苦しみを共に分かち合える温かい心、豊かな人間性と倫理観を備えた人材を育成する。

2. 看護学に求められる社会的使命を遂行し得る人材の育成

看護専門職として必要な知識、技術を修得し、人々の健康と生活に関わる諸問題に対して、科学的な根拠に基づく判断力と問題解決能力及び看護学研究に関する思考力と創造性を涵養し、看護学に求められる社会的使命を遂行し得る人材を育成する。

3. 調整・管理能力を有する人材の育成

保健・医療・福祉等について総合的視野を持ち、関連分野の人々と連携・協力して行われる看護実践を通して、調整・管理能力を有する人材を育成する。

4. 国際社会でも活躍できる人材の育成

国際的な視野から、健康問題や看護問題を思考、判断し、国際社会でも活躍できる人材を育成する。

5. 将来の看護リーダーの役割を担う人材の育成

社会状況の変化を踏まえ、看護が担うべき役割を展望し発展させるため、自らの研鑽を重ねながら、その資質向上に努め、看護学の発展に寄与し、将来の看護リーダーとなることができる人材を育成する。

4.1.3 アドミッション・ポリシー（求める人材）

入学者選抜試験として、一般入試（「前期日程」「後期日程」）、推薦入試、社会人入試に加え、3年次への編入学試験を実施し、以下の資質を有する優秀で意欲ある人材を幅広く求めています。

1. 大学で学ぶ上で必要とされる基礎的学力を身につけている人
2. 主体的にものごとを考え、行動できる人
3. 自らの意見を表現でき、他者と積極的なコミュニケーションができる人
4. 看護分野の発展に貢献することを志す人

4.1.4 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）

教育理念・教育目標を受け、以下のような方針に基づいてカリキュラム（教育課程）を編成している。

1. 看護職として必要な豊かな人間性と倫理観を育成するために、人間科学領域の科目と看護専門領域の科目を統合して学べるように、両者の科目を並行して配置する。
2. 看護職として必要な知識・技術およびそれらの科学的根拠を学ぶことができるように、看護専門領域の科目を健康・疾病・障害の理解、看護の基本、看護援助の方法、看護の実践、看護の発展の順に配置する。
3. 多様な場での多様な対象の健康レベルにあわせた看護実践能力を身に付けるために、人間の成長・発達段階別、健康の維持増進期から終末期にいたる健康段階別、施設内・地域・在宅という看護の提供場所別の看護を段階的に学べるように設定する。
4. 個人・家族・組織・地域の健康課題を解決する能力を育むために、大学の位置する石川県、能登地域を題材にして、文化や自然・暮らしを学ぶ科目、地域の保健・医療・福祉を学ぶ科目、地域の課題を解決しながら学ぶ科目を配置する。さらに、他の地域への応用力を養う看護専門領域の実習科目を配置する。
5. 複雑な状況に対応する能力と、多職種と連携・協働しながら看護の専門性を発揮できる能力を育むために、統合科目を設定する。
6. 将来の多様なキャリア発展の可能性を涵養するために、国際看護、看護マネジメント、政策形成に関連する科目を配置する。
7. 生涯学習能力を養うために、自学自習や討論する機会を積極的に取り入れる。

4.1.5 ディプロマ・ポリシー（学位授与に関する方針）

卒業までに所定の単位を修得し、看護の基盤を備え、個人・コミュニティ・社会の健康課題の発見と解決に貢献するために、様々な知識や技術を応用し援助する能力と、社会の要請に応じて新たな知識や技術を探求し創造していく意欲や能力を有する者に、学士（看護学）の学位を授与する。

このような能力を修得するためには、以下の学習成果をあげることが求められる。

1. 看護の対象となる人の人権を尊重する姿勢や共感的態度を通して援助関係を形成できる。
2. 人の命や暮らしを理解し、健康課題を科学的根拠に基づいて総合的にアセスメントし、課題解決に向けて適切な看護が実践できる。
3. 保健・医療・福祉等について総合的視野を持ち、関連分野の人々と連携・協働することが理解できる。
4. 看護専門職としての価値観・専門性を生涯にわたり発展させる素地を身につける。

4.2 学部学生の入学・在学・卒業の状況

(1) 入学の状況

①入学定員・収容定員

単位 (人)		
入学定員	3年次編入学定員	収容定員
80	10	340

②試験実施日

実施日	
3年次編入学試験	平成27年 9月26日 (土)
推薦入試・社会人入試	平成27年11月21日 (土)
一般入試前期日程試験	平成28年 2月25日 (木)
一般入試後期日程試験	平成28年 3月12日 (土)

③受験状況等

	単位 (人、倍)							
	募集定員	志願者数	志願倍率	受験者数	受験倍率	合格者数	実質倍率	入学者数
	A	B	B/A	C	C/A	D	C/D	
3年次編入学	10	14	1.4	7	0.7	5	1.4	5 (5)
推薦入試	30	57	1.9	57	1.9	30	1.9	30 (29)
社会人入試	若干名	3	—	3	—	1	3.0	1 (1)
一般入試前期	40	127	3.2	116	2.9	45	2.6	44 (40)
一般入試後期	10	163	16.3	60	6.0	10	6.0	8 (8)

() の数字は内数であり女性の数を示す

(2) 在学の状況 (平成28年3月1日現在)

		単位 (人)				
学 年		1年次	2年次	3年次	4年次	計
在学者数	男性	3	6	3 (0)	5 (1)	17 (1)
	女性	81	76	87 (6)	94 (8)	338 (14)
	計	84	82	90 (6)	99 (9)	355 (15)

() の数字は内数であり編入学者の数を示す

(3) 卒業の状況

①卒業者数 第13期生

単位 (人)

区 分	計	入学年度別卒業者数		
		平成23年度以前 入 学 者	平成24年度 入 学 者	平成26年度 編入学者
卒業者数	88 (84)	3(3)	77(73)	8(8)

() の数字は内数であり女性の数を示す

②卒業後の進路状況 第13期生 (平成28年3月31日現在)

単位 (人)

区 分	県 内		県 外		合 計		
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	
就 職	看護師	55	62.5%	17	19.3%	72 (68)	81.8%
	国公立病院(独立 行政法人を含む)	45	51.1%	11	12.5%	56 (53)	63.6%
	上記以外の病院	10	11.4%	6	6.8%	16 (15)	18.2%
	保健師	4	4.5%	1	1.1%	5 (5)	5.7%
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0 (0)	0.0%
	計	59	67.0%	18	20.5%	77 (73)	87.5%
進 学	大学院博士前期課程	0	0.0%	0	0.0%	0 (0)	0.0%
	養護教諭特別別科	4	4.5%	2	2.3%	6 (6)	6.8%
	その他	1	1.1%	2	2.3%	3 (3)	3.4%
	計	5	5.7%	4	4.5%	9 (9)	10.2%
	未 定	1	1.1%	1	1.1%	2 (2)	2.3%
	合 計	65	73.9%	23	26.1%	88 (84)	100.0%

() の数字は内数であり女性の数を示す；割合は、総数88人を100%としたもの

③主な就職先 第13期生 (平成28年3月31日現在)

県内	県外
石川県立中央病院	富山県立中央病院
金沢大学附属病院	富山大学附属病院
JCHO 金沢病院	富山県赤十字病院
金沢医科大学病院	福井県立病院
国立病院機構 金沢医療センター	名古屋第一赤十字病院
金沢赤十字病院	J A岐阜厚生連 久美愛厚生病院
公立松任石川中央病院	市立恵那病院
小松市民病院	岐阜県総合医療センター
市立輪島病院	国家公務員共済組合連合会虎の門病院
金沢市立病院	東京慈恵会医科大学附属病院
国立病院機構 医王病院	国立国際医療研究センター
公立能登総合病院	がん研有明病院
公立穴水総合病院	千葉大学医学部附属病院
公立宇出津総合病院	国立循環器病研究センター
みずほ病院	福井県勝山市保健師 など
石川県保健師	
七尾市保健師	
穴水町保健師 など	

4.3 教育・履修体制

本学の教育は、人間科学領域の5学科目群と看護専門領域の5講座に属する教員が担当します。

領域	学科目群又は講座	科目群	教育内容
人間科学領域	人間形成系群	健康体力科学	自己の健康・体力づくりを生涯にわたり実践していくための理論と方法を修得させるとともに、看護の対象者の健康獲得を目指すための知識と技術について教授する。
	人文科学系群	哲学	哲学・心理学的な思考を通して、人間の本質と存在の意義について理解を深めるとともに、看護職者として悩める人を理解し援助するための知識と方法、態度について教授する。
		心理学	
	社会科学系群		人々の生活を支える社会のしくみと人間と社会環境との関わりについて理解を深めさせるとともに、社会科学的視点から保健・医療・福祉・看護が抱える諸問題について教授する。
	自然科学系群	人間工学	人々の生活と環境との関わりや人間と環境との共生について理解を深めさせるとともに、人間の日常生活行動や看護現場での諸問題について人間工学的側面から教授する。
国際・情報科学系群	英語		国際的な視野から健康や看護問題を思考、判断し、国際社会でも活躍できる思考力と語学力を教授する。また、高度情報社会に対応できる基礎力と看護情報の統計処理能力を教授する。
	情報科学		
看護専門領域	健康科学講座	機能・病態学	人間の生命現象や身体の構造・機能と心身の健康の保持・増進、疾病・障害の発症と回復のしくみに関する理論と知識、技術を科学的根拠に基づいて系統的に教授する。
		保健・治療学	
	基礎看護学講座	基礎看護学	「看護とはなにか」という看護の概念・本質と看護の基本となる理論と知識・技術、及び看護職者として必要な態度について教授する。
	母性・小児看護学講座	母性看護学	ライフサイクルのうち、妊娠・分娩・出産から思春期にわたる母子とその家族に特徴的な発達課題と健康問題を踏まえ、看護援助に必要な知識や理論と実践の方法について教授する。
		小児看護学	
	成人・老年看護学講座	成人看護学	ライフサイクルのうち、成人期から老年期にわたる対象に特徴的な発達課題と健康問題を踏まえ、看護援助に必要な知識や理論と実践の方法について教授する。
老年看護学			
地域・在宅・精神看護学講座	地域看護学	地域で生活する個人・家族・特定集団・地域住民全体を対象とした地域看護の特徴を踏まえ、活動の場(学校、職場、在宅、地域全体)とその対象の特性に応じた看護援助、及びライフサイクル各期のメンタルヘルスの課題や精神的な健康問題をもつ対象への看護援助に必要な知識や理論と実践の方法を教授する。	
	在宅看護学		
	精神看護学		

4.4 委員会活動

4.4.1 教務委員会

委員長：村井嘉子 教授

委員：川島教授、西村教授、林教授、多久和教授、織田准教授、山岸准教授、北山准教授、
垣花准教授、中道講師、川村講師、木森講師、松田教務学生課長

委員補助：曾山助教、子吉助教、寺井助教

事務局：山岸専門員

活動内容：

1. 広い視野と人間性を育成するとともに、専門教育の基礎となるような教養教育を実施した。
 - 1) 新入生及び各学年に対して新年度学習ガイダンス等の機会を得て、教養科目・専門科目の関連性について説明し、看護学における学習の意義について説明し理解を深めた。
 - 2) 昨年度に引き続き能登地区において、地域とそこに住む人々の生活を理解することを目的に民泊を実施した。住民との活動、寝食を共にすることで目的を達成することができた。
2. 「フィールド実習」科目に初年次教育の試みをスタートした。

前年度までの1年次必修科目「フィールド実習」を通して学生の学習状況・課題を受けて、「フィールド実習」科目に「調べる」スキル、「書く」スキル、「自分の意見を述べる」スキルを教授する academic literacy 講義を実施した。大学生・専門教育の基礎となる能力を定着させ、学習の改善を目指すものである。今年度、学生の提出されたフィールド実習報告書において、自身の学びをまとめて記述するという点で質的改善の変化が見られた。しかし、「読む」スキルについても教授が必要と考えられたことより、次年度に向けて新たな教育方法を検討した。
3. プレゼンテーション能力向上に向けての取り組みと評価
 - 1) この取り組みは、継続的・経年的な取り組みであり、授業科目「表現学」の履修、及びフィールド実習報告会、卒業研究発表会、看護学実習におけるカンファレンス等を通して、全学年の学生がその学年において自己の学びを複数回において発表する機会を経験した。また、その都度他者の学びを傾聴することで、その能力の向上に努めた。
 - 2) 卒業研究発表会においては、これまで以上に学生が積極的に運営・参画できるように、発表会の座長の役割を経験させた。指導下においてしっかりと役割を遂行し、成功裡に終了した。
4. 授業内容を精選・スリム化することにより授業時間数を減少させ、学生の更なる自学自習を推進することを試みた。

本取り組みの初年度であり、各領域における授業科目の独自内容と他科目の関連性を考慮しながら講義を再構築し、これまでの教授内容において重複や統合の可能性について検討しながらの授業展開であった。授業進行に合わせて学生へ課題提示、事前学習の促しを試み、学生は真摯に取り組んでいたと考えられる。次年度の学生の理解の状況、学びの蓄積状況を

把握しながら経年的な取り組みを継続する必要がある。

5. 模擬患者を活用した教育方法の試み

県内模擬患者の協力により、4回の授業を実施した。学生は、状況のリアル感を得ることが出来ることに加え、看護計画が立案で終わることなく実践を行うことで、看護援助方法に自信を得ること、課題を明らかにすることができた。次年度以降も模擬患者を活用した授業・演習を継続する予定である。

6. 新規科目「ヒューマンヘルスケア」を展開し、学年進行に伴い定着させた。

- 1) 県内市町村と連携・協力し、これまでのサービ斯拉ーニングを基盤として、地域の健康課題や地域づくりの課題などをテーマに課題解決型学習に取り組んだ。
- 2) サークル活動や災害ボランティア実践活動等においてフィールドワークを継続した。その過程において異学年交流の促進を図ることを目指して、昼食時間の活用、放課後、土日の有効活用等活用した。
- 3) 科目担当教員会議を開催において授業進行における課題を明らかにし、本科目における発表会（場）の確保、異学年交流が促進するための打開策を提示し試行中である。
- 4) 本年度、新たに66名の履修学生が増加し、各班に分かれて活動を行っている。
- 5) 平成26年後期、今年度前期および後期の3期間において授業を進行した結果、27年度卒業予定者4名を含む8名を単位認定した。

7. 臨床現場や保健所等の実習指導者の意見を反映させるための実習指導者会議を開催した。

- 1) 昨年に引き続き、市町・保健所・医療機関等の実習指導者との連絡・協働による実習、また現場の看護職の非常勤教員としての活用を行った。
- 2) 初めての試みとして、臨床教授等の指導者会議において看護学実習指導の在り方、看護現場の実態に即した教育方法の工夫についてグループ単位に分かれて意見交換した。他施設における実習指導方法の工夫、他指導者の意見等を聞く機会となったこと等、おれからの指導方法の参考になったと言う概ね肯定的な意見であった。会議に参加してよかったという感想が聞ける会議運営の工夫をしていく必要がある。
- 3) 前年度の臨床教授等の称号付与に関する内規の変更、称号付与の手続き文書郵送の時期を変更したことで、スムーズな付与が実施できた。

8. 英語教育充実への取り組み

英語eラーニングは、音声教材ファイルをアップロードし試験準備に活用を促し、各期の試験前には全員が利用している。

TOEFL や TOEIC 等の英語評価の意味について継続的教授により、複数の学生より受験を試みたという報告を受けている。これまで全くそのような行動が見られなかったことを踏まえれば英語学習に対する意欲は高まっていると言える。

CALL システムは、基本的には試験時に活用している。しかし、英語力が極端に低い学生が一定数いるために頻回に活用することが難しいことが課題である。

9. 履修規程に関わる詳細事項の明文化、既修得単位認定の見直し、新しい成績評価方法導入に

ついて整備した。

- 1) 学則12条に基づき、本学が協定を締結している放送大学及びシティカレッジにおける履修において、本学の人間科学領域の選択科目1科目2単位までを卒業要件として認めることを明文化した。
- 2) 平成28年度3年次編入学生より、「フィールド実習」を既修得単位認定を行う科目とした。
- 3) 平成28年度入学生より成績評価においてGPA制度を導入することを決定した上で、その具体的な内容を決定し履修規程に明文化した。

10. 大学間連携共同教育推進事業において、平成27年度卒業生より3名に対してグローバル人材「修了証」(ヤングリーダーの称号)が授与された。

4.4.2 学生委員会

委員長：牧野智恵 教授 (学生部長)

委員：今井教授、阿部准教授、彦准教授、加藤准教授、岩城准教授、中田准教授、川村講師、木森講師、金谷講師、米田講師、市丸講師、松田教務学生課長

委員補助：松本助教、金子助手

事務局：納橋専門員

活動内容：

1. 自学自習能力と自律的な判断力・行動力の育成にむけて、生涯にわたって自学自習していく能力と看護職者としての自律的な判断力・行動力を育成した。
 - 1) 大学行事、自治会、課外活動における学生の自主的運営を推進するために、大学祭の企画・運営を学生の主体性を尊重した。昨年度の実行委員からの引き継ぎを早めるなど指導することで、主体的に実践していたように思う。
 - 2) 自治会が自主的に学生の要望調査を行い、学長等との懇談会を3月に実施し、その内容を、教員及び各学年に周知した。
 - 3) 看護の発展に資する能力の育成として、学会等での卒業研究成果の発表を促進した。本年度は学会発表11件と、論文掲載が1編であった。
 - 4) 災害ボランティアサークルの活動を紹介するサイトを大学ホームページにリンクすることにより、学生の自主活動を支援した。
2. 高校教育から大学教育への適応のため、学生が自ら能動的に学ぶことの習慣化を支援した。
 - 1) 新入生歓迎会、開学記念式典、地域連携事業やボランティア活動、さらに8月と9月に学生全体会を開催し、異学年交流を促進した。
 - 2) 地域へのボランティア活動を単位化した科目「ヒューマンヘルスケア」などカリキュラムの改革を行い、自学自習、異学年交流を促進した。
 - 3) 幅広い教養を深める機会を提供するために、入学式ガイダンス、各学年ガイダンスにおいて石川コンソーシアム活動を紹介し、活動を促した結果、大学コンソーシアム石川「大学間共同教育推進事業」の本学提供プロジェクト民泊に22名が参加し、「学都いしかわグローバル人材育成プログラム」の修了生が本学から2名出た(武田悠花は修了証A.B.C、

星川亜由美は修了証 A. B)。

3. 教育環境の充実

- 1) 実習環境の充実に向けて臨床教授 17 名、臨床准教授 50 名、臨床講師 56 名を任命し、臨床教授等と本学教員の合同会議を 2016 年 2 月 29 日に実施した。今年度は、臨床教員のみグループでそれぞれの指導上の問題や困っている点、工夫している点についてグループワークし、全体発表していただいた。活発な意見交換ができ、発達障がい者への指導についても意見交換できた。
- 2) 学生が主体となって、学生の学主幹今日に関するニーズ調査を行った。その結果を基に、学長、局長、学生部長、総務課と学生代表とで座談会を行い、教室の改善を行った。要望内容に対して、情報処理室のヘッドホン、トイレの荷物置き場、食堂の有効利用など、改善・対処の可能な点は早急にに応じていくことが学生に伝えられた。

4. 学生支援の充実

- 1) 相談体制を充実するため、各学生相談窓口の一覧を示したパンフレットを作成し、ガイダンス時に別紙で配布すると共に、学生便覧に掲載した。
- 2) 1～3 年の各学生担任は、学生と教員の相互のコミュニケーションや学習支援を強化するために、当該学年の授業担当者から選任した。4 年の学年担任は持ち上がり。また、各学年クラスアワーにおいて複数担任による相談体制を周知し、担任・副担任間で連携しながら生活面、精神面、学業面等へのサポートに努めた。また、1 学年には入学ガイダンス後、2、3、4 年には新学期当初にクラスアワーを実施し、学生への学習支援を行った。
- 3) 2 ヶ月に 1 回学生相談部会を開催し、学習支援が必要な学生を確認するとともに、必要時は個別に相談支援を行った。特に、適応障害、抑うつ傾向、進路に悩んでいる学生には、保護者を含め、担任と学生部長が面談し、学習支援を行った。
- 4) 学生の学習意欲の向上のため、開学記念日で 3 団体（音楽サークル、華サークル、いきいき交流サークル興津チーム）に学長表彰を行った。3 月の卒業式には 7 名の卒業生に学長表彰の授与を行った。
- 5) 大学生活に必要な生活環境を整えるために、保健室を通じた健康管理を実施。年度当初の健康診断、抗体価検査、予防接種の接種勧奨、それらのデータ管理を実施。また、個別保健指導に加え、定期的な保健だよりの発行や掲示板の活用にて保健指導や健康情報を配信し、健康管理・感染症管理に努めた。学校医と連携し、7 月に今年度 1 回目の健康相談会を実施した。随時学生相談を受け、学生の状況把握に努め、学生相談員や担任と連携をとりながら学生支援を行った。来年の編入生への B 型肝炎ワクチン接種前の検査の実施を検討し、実施することとなった。
- 6) 学生の経済状況に応じた支援のための授業料減免制度および各種奨学金制度について、入学式のガイダンスおよびホームページにて周知斡旋を行った。また、学生の家庭事情に応じて、随時、授業料減免、奨学金貸与を行った。
- 7) 卒業生・修了生へホームページや卒業生会（さくら会）新聞等で行い、情報提供の強化をはかった。また、卒業生会（さくら会）では同窓会の機関紙「さくら」で、本年度の卒業生、修了生への図書館利用について周知した。

5. 地域の保健、医療及び福祉の向上に貢献できる人材を輩出し、地元定着を推進した。
 - 1) 県内の保健医療福祉施設や看護系教員からの情報収集を行い、病院説明会就職説明会の情報を学生に提供するなど、県内の病院の紹介に勤めた。今年度は、県内就職60名、県外就職18名、進学9名である。
 - 2) 卒業後に看護師等として石川県内で一定期間勤務することにより返還が免除される、看護師等修学資金制度の周知を図った。
6. 本学の卒業生・修了生とのネットワークの維持強化を図り、広報活動を積極的に行った。

4.4.2.1 学生相談専門部会

部会長：牧野智恵 教授

部会員：武山教授、中田准教授、米田講師、大江助教、井上囑託

事務局：松田教務学生課長

活動内容：

1. 学習支援として相談体制の強化

近年、大学生活の中で、友人関係、学業等の悩み、さらに発達障がい気づかないまま入学し本学で演習や実習がはじまると、学習に支障を来している学生が増えてきている。さらに来年度から障がいを持った学生への合理的配慮が義務づけられることを念頭に、その対応を強化した。

- 1) 学生相談窓口のパンフレットを作成し、新年度ガイダンス時に別紙で配布した。また学年担任の存在についてもガイダンスで紹介し、学生が相談しやすい体制を整えた。
- 2) また、各学年クラスアワーにおいて複数担任による相談体制について周知し、担任・副担任間で連携しながら生活面、精神面、学業面等へのサポートに努めた。
- 3) 担任によるクラスアワーを適宜開催するとともに、拡大学生委員会、学生相談部会等で学習支援等が必要な学生を確認し、個別相談を実施した。
1学年には、4月、5月、7月、10月にクラスアワーを実施し、2、3、4年においても新学期当初にクラスアワーを実施し、学生への学習支援および体調不良学生の把握を行った。また、2ヶ月に1回学生相談部会を開催し、学習支援が必要な学生を確認し、必要時相談支援を行っている。特に、心に悩みを抱えている学生や進路にとまどいを示している学生に対しては、担任と学生部長が本人または保護者と相談し面談を行った。
- 4) 発達障がいの学生に対しては、随時、専門家の指導を仰げる体制を整えるとともに、対応を統一できるよう情報の共有をはかり、支援体制を整えた。

4.4.2.2 進路支援専門部会

部会長：林 一美 教授

部会員：川島教授、岩城准教授、織田准教授、北山准教授、中田准教授、米田講師

活動内容：

進路支援担当制のもと、7名の進路アドバイザー教員が学生支援を学生個別に行った。4年生全体への情報提供等は4年クラスアワーなどをとおして、適時期におこなった。学生が早期か

らのキャリア形成を計画できるように、3年生への進路支援ガイダンスや卒業生との進路セミナーを3年クラス担任と連携しながら実施した。医療機関や保健師募集などの求人には情報収集につとめた。その結果、看護師国家試験は100.0%(全国平均89.4%)、保健師は95.5%(全国89.8%)であった。就職率は国家試験不合格者をのぞくと100%の就職率と目標を達成した。引き続き、学生の個別性に対応したきめ細かい進路支援を継続して行う。

4.4.3 研究推進委員会

委員長：大木秀一 教授（附属図書館長）

委員：高山教授、小林教授、彦准教授、米田講師、木森講師

委員補助：千原助手、中嶋助手

事務局：田淵主事

活動内容：

1. 学内研究助成について

平成27年度は研究成果に見合った適切な予算執行計画と研究成果の発表促進を主旨として、平成28年度学内研究助成募集要項によりA)研究プロジェクト、B)研究成果公表の2枠で募集した。研究費は外部資金から獲得するものという意識を醸成しつつ、機動的かつ適切な研究費の配分に努めた。重点課題（少子高齢化、がん看護、在宅ケア）を設定した。これまでの研究の成果について、自己点検評価を行い、研究の質の向上に努めた。本学教員が大会長となり開催する学術集会等への助成として、学会開催助成を開始した。

2. 教育・研究推進に係るフォーラム等の開催

平成27年度は、学内研究集会の時期やあり方について平成26年度に実施したアンケート結果を反映させ、教員と学生の積極的な参加をさらに促進した。

以下は平成27年度に本委員会が主催となり開催した学内集会である。

1) 研究フォーラム

開催日時：平成27年6月24日（水）16:30～17:40

参加者：45名

場所：管理棟1階 地域ケア総合センター研修室

内容および講師：

「Sally Clark 事件と Lucia de B. 事件 裁判における 統計的誤謬」

小林宏光教授（人間科学）

「クリティカルケア看護に関する研究の軌跡」

村井嘉子教授（成人看護学）

2) 研究サポート集会

対象者：学内教員および大学院生

1回目開催日時：平成27年8月5日（水）16:20～17:20 参加者：47名

2回目開催日時：平成27年10月7日（水）16:15～17:10 参加者：37名

場所：管理棟1階 地域ケア総合センター研修室

内容および講師：

- | | |
|-------------------------------|---------------|
| 1 回目：石川看護雑誌の論文投稿について | 小林宏光教授（人間科学） |
| 原稿作成の基本的な技術 | 同上 |
| 2 回目：本学における科研費取得の動向 | 大木秀一教授（健康科学） |
| 科研費申請の事務手続きについて | 小林宏光教授（人間科学） |
| 科研費獲得者による申請のポイントと獲得後の研究遂行について | |
| 基盤研究 B について | 浅見洋教授（人間科学） |
| 挑戦的萌芽研究について | 米田昌代講師（母性看護学） |
| 基盤研究 C について | 丸岡直子教授（基礎看護学） |

3) 平成 27 年度学内研究助成成果報告会の開催

21 課題の発表がなされた。

開催日時：平成 27 年 9 月 16 日（水）13:00～15:00 参加者：41 名

平成 27 年 9 月 25 日（金）10:00～12:10 参加者：50 名

場 所：教育研究棟 1 階 大講義室

4) 石川県立大学との研究交流会の開催

石川県公立大学法人 2 大学の学術交流を目的とした研究交流会を実施した。

開催日時：平成 27 年 8 月 7 日（金）16:30～17:55 参加者：34 名

場 所：金沢都ホテル 7 階 鳳凰 西の間

演題・講師：

「目視困難な末梢静脈可視化装置の開発」

木森佳子講師（本学 基礎看護学）

「ゼニゴケ、遺伝子、役に立つ？」

竹村美保准教授（石川県立大学 附属生物資源工学研究所）

「転倒リスク場面観察時における看護師の眼球運動とキャリア形成」

寺井梨恵子助教（本学 成人看護学）

「チェコの事例にみる女性の教育機会とキャリア形成」

石倉瑞恵准教授（石川県立大学 教養教育センター）

3. 研究内容・研究成果の情報発信

平成 27 年度は、本学ホームページの教員活動紹介における研究成果の公表と更新を積極的に行うように教員に促した。

4.4.3.1 共同研究審査部会

部 会 長：大木秀一 教授（附属図書館長）

部 会 員：丸岡教授、吉田教授、長谷川教授、小林教授、彦准教授、加藤准教授

活動内容：

平成 27 年度学内研究助成（2 次募集）申請・海外研究発表旅費に関する助成申請の審査を行

い、採択案を決定し、研究推進委員会に採択案の審議を付託した。教育研究審議会で採択が決定した。平成 28 年度学内研究助成申請の審査を行い、採択案を決定した。研究推進委員会に採択案の審議を付託した。

4.4.4 情報システム委員会

委員長：大木秀一 教授

委員：浅見教授、田村助教、川端助教、大江助教、千原助手

事務局：小林主任主事

開催頻度：随時

活動内容：

本委員会は本学情報システムの管理・運営、および本学における情報環境の改善を担当している。現在、定例の委員会開催は行っておらず、石川県立大学と合同で石川県公立大学法人情報ネットワークシステム保守委託業務の作業実績報告を 2 か月に一回受けている。その際に法人本部・両大学・業者の間で意見交換を行っている。今年度は学内における無線 LAN 設置に向けて教員から意見を収集し、その結果を反映させた提案を行った。

4.4.5 広報委員会

委員長：武山雅志 教授

委員：吉田教授（研究科長）、牧野教授（学生部長）、丸岡教授（看護キャリア支援センター長）、長谷川教授（地域ケア総合センター長）、大木教授（附属図書館長）、高山教授、村井教授、林教授、松原教授、魚事務局長

委員補助：曾根助教、清水助教、千原助手

事務局：塚本課長補佐

活動内容：

1. オープンキャンパス

1) 第 16 回 平成 27 年度 オープンキャンパス 2014 の企画立案・準備・実施

夏：開催日時 平成 27 年 7 月 18 日（土）10：00～14：00

秋：開催日時 平成 27 年 10 月 24 日（日）10：00～12：00

2) 第 17 回 平成 28 年度 オープンキャンパスの検討

日程 夏 平成 28 年 7 月 16 日（土）、秋 10 月 29 日（土）午前 開催予定

2. キャンパスネット IPNU（大学新聞）

1) 第 28 巻 2015. 10 の企画立案・編集・発行

2) 第 29 巻 2016. 3 の企画立案・編集・発行

3. ホームページ

1) ホームページの運用

2) 新着情報コーナーの変更

- 3) 教員用 HP に関する研修会 平成 28 年 2 月 22 日 (月) 14:40~16:10
講師：仲上豪二郎先生 (東京大学)、山本隆一郎先生 (上越教育大学)
- 4) 大学案内 DVD に関するコンセプトの検討
- 5) 英文ホームページ修正の検討

4. 大学案内 (学部・大学院)

- 1) 2015 (学部・大学院) の企画立案・編集・発行
- 2) 2016 (学部・大学院) の企画立案・編集

5. 大学コンソーシアム石川

- 1) 情報発信専門部会 第 1 回 平成 27 年 4 月 23 日 (木)
第 2 回 平成 27 年 12 月 10 日 (木)
第 3 回 平成 28 年 3 月 7 日 (月)
- 2) 高大連携セミナー 平成 27 年 10 月 6 日 (火)
- 3) 県外進学説明会 長野市 平成 27 年 9 月 10 日 (木)
- 4) 出張オープンキャンパス担当講師の調整と依頼 2015 年度、2016 年度
- 5) 石川の大学ガイドブックの編集 2015 年度版、2016 年度版

6. 学生広報委員活動のサポート

- 1) オープンキャンパス
- 2) ナース・ステーション (医心発行)
- 3) 石川大学のガイドブック

7. メールマガジン登録システム構築

平成27年度のオープンキャンパスは早めの周知が功を奏したのか、若干名だが参加者が増えた。

本学ホームページの更新については昨年度よりは増加したものの、まだすべての活動がアップされているわけではない。平成28年度からは各委員会にホームページ係を置き、更新を促すようにすることになった。また「お知らせ・新着情報」を見やすい形に変更した。さらに講座または研究室単位での教員用ホームページの設置の準備として研修会を開催した。「大学院生を募集するためにも必須のアイテム」、「取っつきにくいけど始めてみると意外に簡単」という講師の言葉に触発されて早速作ってみようという動きが出ている。

大学案内 DVD はしばらく更新されていないため、他大学の DVD をいくつか委員会で視聴しどのような形がよいのか議論し、平成 28 年度の取組の参考になるコンセプトづくりを行った。本学においては地域ケア総合センター、看護キャリア支援センター、北陸がんプロなどに関係した多くの研修会や行事が開催されている。しかし中には参加者の少ないものもあり広報の十分行き届いていないのではないかと懸念される。そのためメールマガジン登録システムを構築し、平成 28 年度からの運用に備えた。

4.4.6 入学試験委員会

委員長：石垣和子 教授(学長)

委員：松原教授、今井教授、丸岡教授、西村教授、村井教授、林教授、魚事務局長

事務局：林専門員

活動内容：

1. 前年度の実情及び問題点・課題

前年度の各入学試験の募集、実施準備、当日運営、合格発表にいたる一連の事務作業は円滑に実施できた。編入学試験継続の是非、面接評価方法の見直しが継続検討課題として持ち越された。

2. 今年度の目標

- 1) 各入学試験の募集、実施準備、当日運営、合格発表にいたる一連の事務作業を円滑に実施する。
- 2) 課題となっている編入学試験の定員見直しを検討する。
- 3) 課題となっている面接試験の採点方法の見直しを行う。
- 4) 作問体制について作問委員に周知し、適切な作問、採点を保証する。
- 5) その他の入試委員会が担当する作業を確実に行う。課題を発見し、その解決につなげる。

3. 今年度の活動内容・その評価・次年度以降に向けた課題

- 1) 各入学試験の募集、実施準備、当日運営、合格発表にいたる一連の事務作業は円滑に実施できた。実施体制において事務職員と教員との協働がスムーズに行えた。
- 2) センター試験において身障対応の別室対応試験室を設けたため、本学教職員だけでは人員不足となり、法人から2名の応援を得た。
- 3) センター試験の際に試験区域内に部外者が立ち入った。実害はなかったが、今後に向けてセンター試験実施体制を見直すことになった。
- 4) 編入学生の出身校へ調査を行い、その資料をもとに本学で編入学試験を行う意義を検討した結果、募集停止という結論を得た。教育研究審議会での審議、法人への説明と報告を経て平成28年3月にホームページにてその旨を公表した。編入学生の入学は平成29年度が最後となり、平成30年度からゼロとなる予定。
- 5) 面接試験の採点方法はABDまたはABCDの段階評価とし、実際の入試に適用した。次年度以降にその課題の有無、課題があれば解決方法を検討する。
- 6) 入学試験の作問は、アドミッションポリシーに照らした作問基準に則って行われた。
- 7) 7月開催のオープンキャンパス、10月学園祭時のオープンキャンパスへの協力を行った。
- 8) 入試情報のホームページ上での公開と管理を行った。
- 9) 入試方法と入学者の特徴との関連に関する調査(入試評価部会)を入試評価部会で行った。
- 10) 学生募集に関する活動として、高等学校等への入試説明会、模擬授業等を円滑に分担し、可能な限りすべての要望・申し込みに対応した。北陸新幹線開通に伴う長野県における学生募集に昨年に続き参加した。
- 11) 高校教育の見直しやセンター入試方法の見直しが行われていることから、本学も高大接続

に関連した高校の先生との交流機会を増やす必要性が高まっていると思われた。次年度以降の課題とする。

4. 入学試験の実績

平成27年 9月	3年次編入学試験／看護学研究科博士前期・後期課程入学試験
平成27年11月	推薦・社会人入学試験
平成28年 1月16日(土)・17日(日)	大学入試センター試験
平成28年 1月	看護学研究科博士前期課程(第2次募集)入学試験
平成28年 2月	一般選抜前期日程試験
平成28年 3月	一般選抜後期日程試験

4.4.6.1 入試実施部会

部会長：非公開

部会員：非公開

活動内容：

1. 看護学部入学試験の準備・実施体制およびそれに付随する業務
2. 研究科入学試験の準備・実施体制およびそれに付随する業務
3. 大学入試センター試験の会場準備・実施体制およびそれに付随する業務

4.4.6.2 入試評価部会

部会長：非公開

部会員：非公開

活動内容：

以下について検討した。

1. 全国の国公立看護系大学、近隣の看護系大学の3年次編入学試験に関すること
2. 平成26年度からの本学3年次編入学試験科目変更後の状況に関すること
3. 本学入学試験の各選抜方法と入学後の修学状況、資格取得状況に関すること
4. 本学推薦入学試験入学者の入学後の修学状況、資格取得状況に関すること

4.4.7 自己点検・評価委員会

委員長：石垣和子 教授(学長)

委員：浅見教授(学長補佐)、小林教授、大木教授(附属図書館長)、
長谷川教授(地域ケア総合センター長)、丸岡教授(看護キャリア支援センター長)、
西村教授、吉田教授(研究科長)、牧野教授(学生部長)、高山教授(学長補佐)、
魚事務局長

委員補助：田村助教、松本助教、森田助教

事務局：田淵主事

活動内容：

1. 前年度の実情及び問題点・課題

前年度は、隔月に委員会を開催し、自己点検評価に関連するテーマを認証評価、研究の評価方法、社会貢献の評価方法、蓄積すべき経年情報、年報、教員評価等に分けて大まかな評価方法の検討を行った。

今年度は、前年度の検討をさらに進めて評価視点や基準を具体化することが課題となる。

今年度も前年度と同様に、委員会規程にある部会は暫定的に吸収し、たとえば年報における研究業績を、教員評価の研究成果と同じ基準にするにはどのようにしたらいいか等、相互に齟齬のないように一堂に会して関連させながら検討する方法を継続することとした。

2. 今年度の目標

- 1) 委員一人ひとりの役割認識を確実にし、各回ごとに計画的に審議案が提出されるような体制を整える。
- 2) 教員評価の試行をさらに行い、評価方法を決定する。
- 3) 教学に関連する実績、研究実績、社会貢献実績について、経年的な蓄積項目を明示する。
- 4) 年報原稿転出時期と教員の1年の振り返り評価時期が同期できるよう工夫する。
- 5) 認証評価（7年ごと）、法人評価（毎年）以外の外部評価を取り入れる方法を検討する。

3. 今年度の活動内容・その評価・次年度以降に向けた課題

1) 委員会体制について

委員補助として3人を任命し、資料収集や細かい作業の手伝い等を依頼した。

前年度に続き、今年度の委員会の作業を下記の8つに分類し、分担を決め、計画的に審議事項とその資料を準備した。委員補助の存在によって、効率よく準備が整い、それぞれの検討が順調に行えた。

平成26-27年度	A 経年評価方法	B 年報作成	C 教員個人評価方法	D 教育評価(全体)方法	E 研究評価(全体)方法	F 社会貢献評価(全体)方法	G 法人評価	H 認証評価
主な目標	IR探求	行程に添った年報の作成	第1段評価の振り返りと第2段の実施	プロセス評価/アウトカム評価項目の検討など	研究業績の量と質評価/研究業績獲得評価など	評価方法 など	中期計画実績、計画	7年ごとの報告書作成/認証評価内容の検討 など
連携する委員会			FD委員会	FD委員会 教務委員会	研究推進委員会	地域ケア総合センター運営委員会	教育研究審議会	教育研究審議会
連携する役職	事務局長・学長	学長(西村・小林)	学長・局長	研究科長・学生部長	図書館長	センター長(地)看)	学長補佐	公大協連携研究員(大木)

2) 教員評価について

目標シート、振り返りシートを1枚に収めた教員評価シートを完成させた。教員評価規程を作成した。2度目の教員評価の試行を行った。

3) 年報提出原稿について

研究業績、社会貢献業績を中心に年報原稿の提出様式を見直し、教員評価にも資料としてつけられるように作成し、教員全体会議にて周知した。

4) 経年評価のための蓄積データの決定について

A, D, E, F について大まかに蓄積データの案が明示された。次年度に自己点検評価書を作成することにしたことから、その際にこの蓄積データの適否も点検されることとなる。

5) 外部評価について

公大協のピア評価を平成28年度に受けることが決定された。

ピア評価委員長に奥野武敏大阪府立大学元学長、看護代表として大分県立看護科学大学村嶋学長に依頼し、残りの評価者は公大協事務局に選出していただくことになった。

4.4.8 FD委員会

委員長：多久和典子 教授

委員：武山教授、川島教授、谷本准教授、中道講師、金谷講師

委員補助：川端助教、小林特任助教

事務局：山岸専門員

活動内容：

1. 学生による授業評価の実施

現行の授業評価項目を継続して各科目の学生による授業評価を授業最終日に行い、科目担当者に結果を開示した。

2. 授業評価・授業参観、および、教育・研究のFDに関する教員を対象としたアンケート

学生による授業評価は現在まで科目担当者に開示されているのみで、その結果が授業改善に活かしきれていない可能性がある。年度末に教員を対象にアンケートを行い、授業評価の開示や教員同士の授業参観に関する教員の意向を調査した。また、教員自身の教育・研究両面でのFDのニーズや課題についても併せて調査を行った。来年度初頭にその結果を取りまとめ、活動方針決定への根拠とする予定である。

3. 新任教職員オリエンテーションについて

27年度はじめに新任教員・職員対象のオリエンテーションを行った。

4. FD研修会について

学内教員による情報共有と学外講師によるミニレクチャーを組み合わせたFD研修会を2回開催した。第1回(7月9日)：学内教員の実習指導に関する情報共有と和住淑子先生(千葉大学看護実践研究指導センター)によるミニレクチャー「マザーマップの活用」；第2回(3月25日)学内教員によるグループワーク形式の授業の取り組みに関する情報共有と中島英博先生(昨年に引き続き2回め；名古屋大学高等教育研究センター)による協働教育に関するミニレクチャー。特に第2回研修会は、「有意義であった」・「次年度に活かせる」との感想や、「今回のように学内教員どうしの情報共有と学外講師によるレクチャーを組み合わせた形式での研修会」を希望する意見が多く聞かれた。

5. FD委員の学外研修について

大学コンソーシアム石川およびコンソーシアム京都の研修に積極的に参加し、FDについての知見を深めた。

4.4.9 ハラスメント委員会

委員長：石垣和子 教授(学長)

委員：浅見教授、多久和教授、川島教授、牧野教授、高山教授、魚事務局長

相談員：武山教授、中田弘子准教授、米田講師、森田助教

活動内容：

1. 前年度の実情及び問題点・課題

前年度は委員会への訴えもなく、問題点・課題の申し送りはなかった。

2. 今年度の目標

ハラスメント案件が発生した場合には適切に対処する。

ハラスメントを予防するような職場環境を醸成する。

3. 今年度の活動内容・その評価・次年度以降に向けた課題

1) ハラスメント自案は発生しなかったことから委員会は開催しなかった。

2) ハラスメントをテーマとした研修会は行わなかった。次年度に研修会開催を検討することになった。

4.4.10 情報セキュリティ委員会

委員長：小林宏光 教授

委員：大木教授、長谷川教授、吉田教授、牧野教授、石川准教授

事務局：小林主任主事

活動内容：学内へのWi-Fi設置に関するセキュリティーポリシーについて検討を行った。

4.4.11 コンプライアンス委員会

委員長：吉田和枝 教授（研究科長）

委員：魚事務局長、村井教授、長谷川教授、林教授、谷本准教授、垣花准教授

事務局：小林主任主事

活動内容：

1. 平成27年6月22日に第一回コンプライアンス委員会が開催され、法人本部からあらためて文部科学省からガイドラインが示されたことに伴う、本学での規定、公的研究費不正使用、研究活動上の不正行為について説明された。また本学の各機関の役割として、研究活動上の不正行為（故意、捏造、改ざん、盗用、二重投稿など）については、コンプライアンス委員会がその防止にあたることが明確化された。公的研究費使用については学長、事務局長が管理、統括し、主に事務部門がこれらの予防及び問題のあった場合調査等を行う。調査等が必要等の場合は、コンプライアンス委員会が諮問機関として機能する。
2. 平成27年7月27日の第二回コンプライアンス委員会では、研究活動上の不正行為の予防のための、CITI Japan e-learning 教材の受講コースの選定が話し合わせ、最終的に必須7単元+オプション4単元の合計11単元と決定した。また、本委員会と倫理委員会の合同研修会開催について必要性が確認され予定された。
3. 平成27年9月29日、不正防止に関する合同研修会（不正防止対策室、コンプライアンス委員会、倫理委員会）を開催した。出席数は42名。法人本部からの研究不正使用、研究活動における不正行為についてのガイドラインについての説明、魚局長の不正防止計画の説明、コンプライアンス委員会からは研究活動上の不正行為の予防、e-learning 受講の奨励

の説明を行い、また倫理委員会からは適切な研究活動のための申請書の記入方法等の説明をおこなった。なお、欠席者のために研修会の録音を取り全員がアクセスできるファイルに収めた。

4. CITI Japan e-learning 教材の受講に関しては教員だけではなく本学の大学院生にもパスワードが発行され受講することができ、教員、大学院生とも是非受講するように勧奨している。3月の時点で受講率は70%以上である。(別ルートで受講したものを含めず)
5. 本委員会は研究活動上の不正行為の予防に努めなければならないが、倫理委員会とのつながりは重要であり、今後さらに合同研修会の充実を図っていく必要がある。

4.4.12 遺伝子組換え実験等安全委員会

委員長：今井美和 教授

委員：小林教授、吉田教授、北山准教授

事務局：細川専門員

活動内容：

平成27年度は申請案件がなかったため、委員会は開催されなかった。

4.4.13 倫理委員会

委員長：吉田和枝 教授（研究科長）

委員：浅見教授、大木教授、村井教授、塚田准教授、加藤准教授、外部委員（9名）

事務局：澤本専門員

活動内容：

1. 平成27年度は学長が委嘱する学識経験者として9名の外部委員の参加を得て、計11回の委員会を行った（1回の委員会に2名の外部委員が出席）。
2. 昨年度に続き卒業研究のみに「付議不要」制度を適用した。6～9月まで12件の付議不要確認を行った。
3. 同意書および倫理申請書について、昨年度様式を改定したが、さらに記入しやすい、審査しやすい方向に暫時修正を加えた。
4. 平成27年9月29日に合同研修会（不正防止対策室、コンプライアンス委員会、倫理委員会）、を開催した。本委員会は、記載方法を理解してもらうことは研究倫理を理解してもらうことに直結しており研究活動防止につながっているという認識のもと、倫理審査の理解の促進を目的とした倫理申請書の記載方法についての説明を行った（合同研修会の概略はコンプライアンス委員会を参照のこと）。
5. 平成28年2月に休学中の学生からの倫理委員会の申請の是非をめぐる話し合いが、倫理委員会および研究科委員会で行われた。結果、休学中の学生の倫理審査の申請はおこなってもよいが、本学の休学制度の意味も踏まえ、指導教員との十分な話し合いのもとで責任ある行動をとるようにとされた。
6. 平成27年度の申請数（付議不要を含む）は、教員27件、前期課程生15件、後期課程生5件、卒業論文16件、付議不要申請12件で合計75件であった（昨年74）。審査の結果は、承認21%

(昨年50%)、条件付き承認73% (昨年41%)、変更の勧告2% (昨年5%)、不承認0% (昨年3%)、非該当5% (昨年2%) であった。条件付承認は、修正された申請の再審査で、100%承認となった。

4.4.14 衛生委員会

委員長：今井美和 教授

委員：大木教授、西村教授、川村講師、中嶋助手、魚事務局長、井上囑託、茶谷隆 産業医

事務局：細川専門員

活動内容：

本学の喫煙場所（管理棟、厚生棟の2箇所）の必要性について、①石川県内大学の喫煙場所設置状況・敷地内全面禁煙の取り組みの調査、②本学教職員対象の「禁煙・分煙に関する意識調査」、③本学学生の喫煙者数の調査を実施し、現在検討中である。

平成27年12月より労働安全衛生法が改正され、ストレスチェック制度が創設、職場でのストレスチェックが義務付けられた。そこで本学では法人の方針に従いストレスチェックを実施することになった。運用の詳細は次年度初めに検討する。

その他、職場巡視、定期健康診断受診状況調査、労働時間に関する実態調査、消防訓練、労働安全衛生研修会を実施した。

4.5 平成27年度 卒業研究論文題目一覧

領域または科目群	学籍番号	氏 名	論 文 題 目
人間科学領域 (18人)	1201010	桂川 鮎子	自死遺族の悲嘆過程についてー子どもを自死で亡くした親の手記を通してー
	1201018	小石奈津妃	心拍数測定によるウォーキングの運動強度の測定
	1201022	近藤 愉架	心拍数計測による登山・ハイキング中の身体負担の評価
	1201028	常林坊優香	小学校低学年での「いのち」の教育について
	1201031	砂田 絢乃	身体障がい者の性支援に対する医療福祉関係者の意識調査
	1201037	竹川 詩織	歩くことを意識した生活習慣が感情や気分及ぼす影響
	1201039	武田 悠花	心因が背景にあると考えられる児童生徒への養護教諭の関わり
	1201044	常廣 明里	精神的悩みを抱え保健室に来室する生徒への支援における校内での連携方法
	1201045	東城 美希	ドラッグラグ短縮に向けた取り組みー文献を用いた日本とシンガポールの比較ー
	1201059	野村 奈生	路面状態が歩行中の心拍に与える影響
	1201060	濱端 楓	訪問看護師が行っている在宅終末期ケアにおける支援について
	1201069	松田 麻佑	保健室登校生徒に対する養護教諭の支援の実際ー対人関係スキル向上の支援に着目してー
	1201074	水本 菜々	地域の課題解決力の向上を図るサービス・ラーニングの検討
	1201078	山内 絢子	看護大学生の住居環境の違いによる食生活と健康管理に関する研究
	1201081	山田 純子	北陸の在留外国人の受診行動に関する研究
	1201082	山本 秀実	アンクルウェイト装着による心拍数の変動について
	1401103	川上優希乃	看護学生の実習におけるストレスと実習段階との関連
1401105	川邊英里奈	家族介護者の性別特徴	

領域または科目群	学籍番号	氏 名	論 文 題 目
健康科学領域 (12人)	1001050	中村 優里	不妊・不妊治療による女性への心理的影響
	1201008	小川 真奈	A 看護大学女子大学生の体型認識とダイエットに関する研究
	1201023	坂井 里帆	看護学生の糖尿病・高血圧の患者教育への意欲に影響を与える要因
	1201032	清女谷亜樹	不妊治療が男性に与える心理的影響と必要な支援に関する文献レビュー
	1201033	善野由希栄	看護大学生による女子高校生への子宮頸がん予防啓発活動の効果 —調査対象者の知識状況に焦点をあてて—
	1201046	徳能 萌	看護学生のがんに対する認識と生活習慣の関連について
	1201049	長田 菜摘	小児肥満の要因についての文献検討
	1201051	中原 春香	破骨細胞の未分化と分化初期における細胞増殖に及ぼすビタミンDの効果
	1201052	中町 陽菜	破骨細胞の未分化と分化初期における細胞増殖に及ぼすビタミンDの効果
	1201054	中村 瑠乃	看護大学生による女子高校生への子宮頸がん予防啓発活動の効果 —調査対象者の特徴と参加者の啓発活動の評価に焦点をあてて—
	1201067	牧島 愛	ビタミンDの破骨細胞の分化初期における細胞増殖抑制効果
	1201073	水野 珠里	看護大学生による女子高校生への子宮頸がん予防啓発活動の効果 —調査対象者の意識状況に焦点をあてて—
	看護専門領域 基礎看護学(15人)	1201002	家中 昭乃
1201004		上田 桃子	認知症高齢者のライフヒストリーを活かした関わりがケアスタッフに与える影響
1201006		近江 翔子	看護学生の転倒リスク場面に対する視覚による観察とアセスメント—IV段階実習前の看護学生に焦点をあてて—
1201007		大野里彩絵	車椅子移乗における補助具使用に関する文献レビュー
1201015		北村 日菜	外来看護師による在宅療養移行支援の実態 —入院決定から入院するまでに焦点を当てて—
1201025		沢田 眸	鼻腔カニューレ装着による皮膚バリア機能への影響—医療関連機器による皮膚障害のケア—
1201030		菅池明日美	看護学生の滅菌手袋装着時における視線軌跡の特徴

領域または科目群	学籍番号	氏 名	論 文 題 目
看護専門領域 基礎看護学 (15人)	1201034	高本奈瑠美	認知症高齢者のライフヒストリーを活かした関わりが本人に与える影響 —自分史アルバム作成過程を通して他者との交流が拡大した1事例の考察—
	1201036	竹内 香織	外来看護師による在宅療養移行支援の実態—患者の入院中・退院後の支援に焦点をあてて—
	1201041	田中麻奈美	アロマハンドマッサージがもたらす前頭葉酸素化ヘモグロビンの変化 —近赤外分光法 (near-infrared spectroscopy : NIRS) による検討—
	1201055	中家菜々望	アロマハンドマッサージが脳活動に与える影響 —前頭葉酸素化ヘモグロビンの変化と心理・主観的評価—
	1201058	野田咲央里	看護職者の手荒れが患者とその療養環境に与える影響
	1201068	松井 久美	認知症高齢者のライフヒストリーを活かした関わりが本人に与える影響
	1201070	松山 未佳	入院患者の清潔方法の違いによる皮膚バリア機能への影響 —医療関連機器による皮膚障害のケア—
	1201080	山崎 祥絵	精油を用いたハンドマッサージが脳活動に及ぼす影響 —前頭葉酸素化ヘモグロビンの変化と心理・主観的評価—
看護専門領域 母性看護学 (7人)	1201005	鵜島 咲	乳幼児突然死症候群 (SIDS) の予防活動の現状と SIDS で子どもを亡くした家族へのケアについての文献検討
	1201017	楠 茉悠	若年女性の子宮頸がん検診受診率向上に関する文献研究
	1201020	小浦理紗子	学童の肥満に関する看護系文献の研究
	1201021	小林 千恵	潰瘍性大腸炎の緩解期の維持と向上のための看護支援
	1201026	芝田 由衣	高齢初産婦の看護に関する文献検討
	1201040	立中由里子	マタニティブルーズ・産後うつ病に対する妊娠期のスクリーニング方法についての文献検討
	1201066	星川亜由美	文献検討からみた学童の効果的なう蝕予防の在り方
看護専門領域 小児看護学 (6人)	1201012	川崎麻友美	NICU 入院児の親子関係を良好にするために行われている支援の母親にとっての効果についての文献研究
	1201029	末岡 弓奈	不登校児をもつ母親の行動変容を促す支援に関する文献検討
	1201048	中嶋 佳奈	NICU に入院している児をもつ母親の不安軽減につながった医療者の支援に関する文献検討
	1201072	水野 綾子	先天性障がい児の母親がわが子を受け入れられるようになる要因に関する文献検討

領域または科目群	学籍番号	氏 名	論 文 題 目
看護専門領域 小児看護学 (6人)	1201077	谷内 愛香	患児のきょうだいへの情報提供の実態と情報提供前後の変化に関する文献検討
	1401108	谷口 莉菜	低出生体重児に対して受容困難な父親の心理とその関連要因
看護専門領域 成人看護学 (8人)	1201001	浅香 朋美	入院中の終末期がん患者に付き添う家族の心理についての文献研究
	1201009	蚊爪 悠花	子どもをもつがん体験者同士の対話から見えてくるもの—親子参加型プログラム後の母親同士の対話から—
	1201043	田端 杏衣	一時的ストーマ閉鎖術後の患者に対する看護の実態
	1201065	府中 明香	せん妄と睡眠障害に対する看護援助の文献的考察
	1201079	山岸まどか	手術室看護に関する研究の歴史的変遷の文献的考察—災害対策・災害看護、チーム連携に焦点を当てて—
	1201083	米浜有佳里	サポートブックを用いた乳がん患者とその子どもへの支援の検討
	1401108	北野 千里	ICUに緊急入室した患者の家族心理に関する研究
	1401110	森 夕希子	富山県におけるオストメイトの防災意識と災害対策の現状
看護専門領域 老年看護学 (7人)	1201011	河口 祐介	認知症高齢者との笑いヨガを実施した大学生ボランティアの脳血流の状態
	1201013	河内 芳水	認知症の介護家族の立場からみた病院の適切性
	1201016	城戸口雅子	笑いヨガを構成する感覚刺激が脳血流に及ぼす影響—高齢者と若者の比較—
	1201019	小泉 花奈	笑いヨガと感覚刺激が脳血流に与える影響についての文献検討
	1201047	中川実乃里	医療現場における認知症高齢者の身体拘束の実態と家族の思い
	1201056	鍋野 杏奈	一般病院に入院した認知症高齢者に対する療養環境及び対応の実態とそれに対する家族の思い
	1201064	藤沢 愛里	笑いヨガが高齢者の脳血流に与える影響—高齢者と若者の比較—

領域または科目群	学籍番号	氏 名	論 文 題 目
看護専門領域 地域看護学 (8人)	1001068	南 陽香	特定健診の受診率向上のための対策と保健師の役割
	1201014	川野なぎさ	肥満男性の食習慣の特徴と介入方法に関する検討
	1201035	高山 優也	労働者に対する効果的なメンタルヘルス対策の検討 —労働者のメンタルヘルスへの介入研究の方法別効果に関する文献検討—
	1201050	中谷 朱里	石川県内市町における災害時避難行動要支援者支援制度の現状と保健師活動との連携について
	1201071	的場 郁未	高齢者の自殺の現状と課題—自殺率の地域差についての文献検討から—
	1401101	石元さと子	人口減少と高齢化が進むA市における介護予防事業の意義と課題 —いきいき百歳体操参加者のアンケート通しての考察—
	1401102	折川 翼	都道府県別自殺率と社会環境要因の関連に関する一考察
	1401107	久保 雪乃	2型糖尿病患者の治療中断の促進要因と阻害要因に関する文献レビュー
看護専門領域 在宅看護学 (5人)	1001060	福島 涼野	難病患者会のグループ活動を継続する上での課題
	1201027	島田 葉子	在宅パーキンソン病女性患者の日常生活上の困難と工夫
	1201057	新田 大貴	能登地域の家族介護者の家族会等の活動・社会的ネットワークシステムの現状と男性介護者に対する支援
	1201076	森口 梨子	日本の終末期医療における事前指示のあり方
	1401104	川西 早苗	能登地域における家族介護者支援の現状と支援者が捉える
看護専門領域 精神看護学 (4人)	1201003	五十嵐一美	一般病棟におけるメンタルケアが必要な患者への看護についての文献検討 —リエゾン看護に着目して—
	1201024	佐藤 舞香	発達障害児支援の多職種連携における養護教諭の意識に関する調査
	1201053	中邨 美菜	小規模事業所におけるメンタルヘルス対策についての文献レビュー
	1201062	東山 佳苗	うつ病を有する休職者の職場復帰を評価するための尺度に関する文献検討